# 越後の しな布

カラー　(34分)

姑も嫁も、シナ織りが生き甲斐だという。

企　画　国立歴史民俗博物館
協　力　文　化　庁
製　作　英　映　画　社

現地協力

新潟県教育委員会　新潟県山北町教育委員会
新潟県山北町雷地区　財団法人　致道博物館

# 記録映画　越後のしな布　カラー34分

## ――製作意図――

シナ布は、かつて北陸地方や東北地方の山間部で広く織られていた繊維で日常生活に欠かすことの出来ないものであった。新潟県岩船郡山北町「雷」地区は、この稀少なシナ布紡織習俗が往時の姿をいま僅かに伝えている。

この映画はシナ布に関する技術の工程を中心とし、さらに製品の利用例や日常生活とのかかわりを描きながら、シナ布紡織習俗の全体像を把握しようとするものである。

## ――解　　説――

シナの木の皮からとった繊維で織られるシナ布は、かつてコウゾやフジなどと共に、古くから北陸や東北地方の重要な繊維のひとつであった。

シナ布で、コモジブトン、ハンテン、馬の鞍の裏地、種籾を収納する袋、魚網、魚籠、畳のへりなどが作られて地域の暮らしには欠かせないものであった。

**春**　・山々の雪が溶け、おそい春がこの山村に訪れる５月、狭い田んぼで人々は田植えを始める。やがて梅雨の季節。自生しているシナの木の皮を剝ぐのに絶好の季節となり、男衆は「カワヘギ」に山へ入る。水をたっぷり吸い込んだシナの木の皮は、「ツクシ」と呼ぶ堅木で作った簡単な道具で面白いように剝がれる。

**夏**　・田の草とりと並行しながら、人々は狭い山地の傾斜面を焼畑にしてそこに赤カブの種を蒔く。
盆が過ぎ農作業が一段落すると、「雷」(いかずち)のあちこちで冬に備えてシナ織りの準備が始まる。

乾燥させておいたシナ皮を一昼夜水に漬け、釜に入れ灰を混ぜて約10時間程煮続ける。こうして煮上げたシナ皮は、熱いうちに叩いたりもんだりして、重なった繊維を剝がし易くしておく。

集落近くの溪流で、女たちが揃って「シナコキ」をする。「コキ」と呼ばれる手作りの道具を使って屑皮をしごき取るのである。

繊維の色あいを調えるため米糠に２日間程桶に漬け、水洗いして乾燥させる。

**秋**　・山間の集落を短い秋が駆け足で過ぎる頃、人々は稲刈りや、８月に蒔いた赤カブの収穫に精を出す。

**冬**　・紅葉もすぎ集落は長い冬を迎える。バアちゃんたちはシナ裂きにとりかかる。続いて裂いたシナの繊維を長い１本の糸につないでゆく。嫁たちも糸を「オボケ」と呼ぶザルに入れて、いそいそと仲間の家へ集まる。

この集まりを「ヨウシ」という。

こうして長く暗い雪空の下で、女たちは交互に寄りあって自分の糸を績んでゆくのである。

次は繊維に撚りをかけ強さを与える「シナヨリ」である。女たちは糸車を持ち寄り、人手をかけて一気に片付けるが、このような助け合いの共同作業は「ユイ」と呼ばれている。

一軒の一機分の糸撚りは５～６人で１日で行ない、次々と交替で仲間の家の糸撚りを済ませてゆく。それを「ユイガエシ」という。

年が明け集落は豪雪に覆われる小正月の頃、ようやく一機分の糸が揃う。

整経。女たちは自分の家で「ハタタテ」の準備に入る。親子、嫁姑など２人がかりで経糸 140本、60メートルの糸を掛ける。複雑で根気のいる仕事である。

入念な準備が全て整い、女たちはいよいよ織りにかかる。

機織りには長い歴史の中で積み重ねられた人の知恵が隅々までゆきわたっている。

バァちゃんも嫁も、「雷」の女たちはシナ織りが生き甲斐だという。生き甲斐は何よりも優先する。

こうして「雷」の女たちは、来る冬も来る冬も「シナ布」を織り続けてきた。姑から嫁へ、親から子へ。

---

### 製作スタッフ

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 製作 | 宮下英一 | プロデューサー | 長井貢 | 演出 | 松川八洲雄 |
| 撮影 | 金山富男 | 照明 | 前田基男 | 解説 | 和沢昌治 |
| 録音 | 加藤一郎 | 音楽 | 小沢直与志 | 効果 | 小森護雄 |

教育映画・記録映画・PR映画・企画製作

HEF

株式会社　英映画社

〒104　東京都中央区八重洲2－6－13 幸田ビル　電話　東京（281）3414．3415．4680